

当苦勞されたと聞きましたので、ぜひそのことを書いていただいたらと無理にお願いして投稿してもらった。

赤坂氏は、昭和五十七年全国瓊瑋福井大会以降、毎年行われる戦友会、そして、瓊瑋三中隊（瓊三会）に一度も欠かず出席してくれています。また全国瓊瑋会事務局長（故）の増田氏とは最大の戦友であったため、氏より依頼あって、シベリア抑留者の遺骨採取には率先して参加されました。

私の末長く信頼する戦友赤坂氏であります。

（富山県 天谷 小之吉）

シベリア抑留六年の足跡

福井県 馬 橋 正

私は、大正十二（一九二三）年六月十五日、福井県の山間部下庄町中荒井で生まれました。下庄小学校に入学し小学三年生まで過ごし、家庭の事情で大野町に

移転し、六年生で卒業し兄の勧めで大阪市港区の菓子店に店員として勤務しました。三年後故郷に帰りましたが、米、砂糖などあらゆる食料が統制になり、世は軍事色が濃くなり統廃業が進み止むなく転々と職場を変え、ついに適齢になり徴兵検査を受ける年齢になりました。幸か不幸か甲種に合格しました。

多くの町民の皆さんに送られて昭和十九（一九四四）年二月、故郷と別れて広島に着き、下関を經由して博多港から玄界灘ヅカイナギの荒波を越えて朝鮮の釜山港プサンポに着き、厳寒の中長い列車の旅で一週間、黒河省瓊瑋駅に到着し、待っていた西村准尉の率いる兵士に引率され四キロ程先の部隊に入隊しました。

その時分は大東亜戦争も終盤に近く、激しい訓練が毎日続きました。そして運命の昭和二十年八月九日、ソ連軍が一方的に侵攻を開始し戦闘となり、戦車を食い止める塹壕掘りが始まり戦闘を交えながらの土方作業を強いられました。私は軽機関銃班だったので機銃を使ってソ軍と戦いました。当時、ソ連の兵士の大半は囚人と幼い少年たちでした。泣き叫ぶ少年たちはか

わいそうで見えいられませんでした。しかし我々もいつ死が来るか分かりません。自分がいつ殺されるかもしれない、相手が敵である限り許すことのできない恐ろしい戦いでした。そして戦闘半ばで私たち一部の兵士に転属の命令が下り、三江省の山奥の陣地へ移転させられました。

その頃、南方戦線は日に日に悪化して、我々の持っていた銃器は取り上げられ、南方戦線で使うためにほとんど持っていかれませんでした。小銃は七人に一丁、機関銃は中隊に一丁という状態で、戦闘もできないためにゲリラ戦に変わりました。

忘れ得ない出来事を一つ。ゲリラ戦をしている時に、陣地に食料補充のために兵長が一人、兵士六、七人で食料基地へトラックに乗って行く途中のことで、ソ連の戦車三台に発見され、戦車砲の砲撃を受けます。近くの山中に逃げ込みました。砲撃が続き、山深い山中を逃げ惑いました。食料は乾パン一食分しか持ちません。外は十一月零下の気温の中、無線一つ持たず、小銃は一丁しかない苦しい逃亡が続きました。山中を

逃げ回る途中に疲れ果てた戦友が、突然我々に銃口を向けて「みんな死ね」と言って七人全員自決しようと言い出した。兵長がなんとか説得して「もうしばらく辛抱してくれ」と頼み、やっと食いつめることができ、三日後に日本兵の地下足袋跡を見つけ、それを頼りに漸く陣地に着きました。このことは今でも忘れることのできない、終戦前の恐ろしいことでした。

その頃、ソ連の戦車が続々と国境を突破して雪崩込み、とても対抗する状態ではなくなりました。そして終戦の報が我々の陣地に知らされました。しかし我々兵士は誰一人として敗戦を信じませんでした。二、三日後ソ連軍から武装解除の通報が入り、致し方なく投降しました。悲しい事態に、ソ軍に従わざるを得ませんでした。そして銃を突きつけられて長い強行軍が始まりました。一日二十里の強行軍を強いられました。与えられる食料は一日三回堅い黒パン一枚と塩だけ入った飲物しか与えられず、夜はテントもなく草原で石を枕にして休眠することしかできず、栄養失調でバタバタと倒れ死亡していく苦しい毎日が続きました。

生きるためには何でも食べていかななくてはならない。行軍中、ヘビ、カエル、土のついたイモ、トウモロコシなど、すべて生で食べました。一番悲しかったのは、行軍途中で道路脇に無数の日本軍兵士の死骸が横たわり、しかも死骸に無数のダニ、シラミとハエが白骨化した死体に群がっている状態が続いたことで、恐ろしい強行軍でした。

ようやくソ連領内の名の知らない小さな駅に着きました。そうして家畜を運ぶ貨物列車に押し込まれ、シベリア中部の街ハバロフスクの収容所に収監されました。

一棟二百人程の平屋建てトタン屋根の収容所でした。着後二日から強制労働に入りました。我々兵士は技能者と技能なしに分けられ、技能なしは土木作業、運搬船の荷物の積み降ろし、製粉工場の作業。いずれも銃を持ったソ連兵の監視のもとでの作業、今思ってもできない重労働の連続でした。零下四〇度の強烈な寒さの中、五十トンもの石炭を積んだ貨車から二人で降ろす作業、または百キロ入ったメリケン粉袋

を八時間積み降ろし。厳冬の穴掘り作業は一時間掘っても十センチしか掘れない。地下は完全に凍っていて鉄棒で必死にやっても作業にならない。それでも強行させられたこともありました。

厳寒時の着衣は、夏物、防寒衣の二種類を武装解除時にもらった衣服で夏冬使い分けて使用しました。食事の内容は黒パン、塩入りジュース、週一回は豚汁の給食があったと思います。

食物は限定されていて、寒さと飢えで凍死する戦友が多く、やがて自分も倒れる時が来ると思う毎日が続きました。また一面、現地のソビエトの市民も食糧難で、収容所のイモの皮を拾いに来る市民を多く見ました。水も出なくなり、コップ一杯で体全体を拭いてダニ、シラミ病になるのを予防する毎日でした。

収容所の兵士に食べさせるコーリヤンや麦等をトラックに積んで収容所へ向かう貨物トラックを市民が待ち構えて襲う事件が後を絶たず、途中、車目がけて飛び乗ろうとして銃殺されるのを目の前で見たことも何回かありました。ソ連の市民も、戦火が長引くため

に生活も限界にきていたと思えました。

収容所生活も長くなり漸く落ち着きを取り戻し、外部の作業に出て市民と話し合いをすることも少しはするようになりました。しかし労働は依然厳しく、過酷な状況は変わりませんでした。

その頃、『日本新聞』が配布されるようになり母国の状況が少しずつ分かってきました。しかしソ連政府の指導で発行する新聞であるために共産主義がすべてで、日本の資本主義を追及し、一般国民を無視した日本政府は市民の敵と非難する報道でした。

この頃から帰還する兵士が多くなってきました。これに伴い民主化運動を進めるために、日本の兵士、特に日本で貧困生活を味わった兵士は、資産家育ちの兵士とは別に共産主義を指導して帰還兵を乗船させる前に洗脳して日本へ帰す、そして日本での共産主義を拡大させようと企画したことは間違いないかと思えます。

自分もその一員に引きずり込まれ、ナホトカ周辺に作られた日本兵収容所を転々と移動させられ共産主義

を普及させられました。

特にウラジオストックでの日本兵への教育は厳しいものでした。そして再びナホトカへ帰されました。その時期、日本へ帰される日本兵士は、ピークを迎えました。しかし即時に日本の船に乗れず順番待ちが続き、厳しい強制労働を一日も休みなくさせられました。

昭和二十三年頃、漸く日本の引揚船が港に現れました。しかし私は二十三年には帰されずナホトカに残されて労働と共産主義を強いられて、二年後やっと解放されて苦しかった抑留生活に終わりを告げて、高砂丸に乗船することができました。待ちに待った日本の船に乗ることができ、ナホトカ港を後にして日本海に出ました。

翌朝、海上に日本の島々が見えて来ました。兵士は抱き合って嬉し涙に暮れ、そして舞鶴港に着きました。両親や兄姉は無事で生きているだろうか、不安がいっぱいでした。下船して待っていてくれたのは父で、幟に馬橋正と書いた旗を振って私を迎えてくれました。涙、涙、涙の感激の一時でした。よくも死なず

に六年を過ごしたと思う一時でした。

この原稿の中に記事にしていない事件は数限りなくあります。また忘れ去って記事として書いてない件は多くあります。老化が原因か、シベリアの地名、旧部隊の戦闘状況、駐屯した陣地名、部隊の上官、同年兵等の名前などまだまだ多く、また機会がありましたら報告します。

【執筆者の紹介】

私と馬橋君が入営した頃は戦争も総力戦に突入し、私の家業の織物業も軍の銃火器を作るために織物機械その他すべての金物は供出を強制されて廃業しました。あらゆる物資は統制され、米も配給になり、勝つためには欲しがりませんと総力戦の様相を呈していました。

同年代の馬橋君は満州六一二部隊第一中隊に入隊され、二等兵として毎日厳しい訓練をされていました。

黒河省環環は、ソ連とは目と鼻の先に見える地帯でした。しかしその頃は銃火器、野砲その他あらゆる武

器は南方戦線へと送られ、正に武器を持たない張り子の虎でした。

馬橋君の父は明治三十六年日露戦争で二〇三高地の激戦に参戦され、乃木大将の馬丁として活躍されていたそうです。また兄も大東亜戦争の終期に沖繩で戦死され、もう一人の兄も中国、フィリピン等いずれも激しい戦闘に参加された一家と聞いています。

馬橋君と機会があり同席する時はシベリア抑留の話にあげられる同志です。

幼少の頃から絵が好きで、毎日のように好きな絵を描いてばけにならないようにと元気な毎日を送っておられます。

(福井県 林 俊男)

軍隊から抑留の五年間

長野県 荻原 進

昭和十九(一九四四)年十二月十日、現役兵として